電気情報工学科５年の海外見学旅行（台湾）

大向 雅人* 宮本行庸*

School trip to a foreign country for the 5th year students in the department of electric and information engineering (Taiwan)

Masato OHMUKAI, Yukinobu MIYAMOTO

ABSTRACT

A study trip for 5th grade technical college students is one of the significant events in technical college life. In the one-week trip, students have visited several places such as factories, bridges, dams, or other architectural structures, depending on their department. It is undoubtedly educational to observe working places or huge constructions in order to consider their future careers. In these days, overseas destinations have become more common in the case of study trips for Akashi National College of Technology. This extends their knowledge in view of international globalization. Although English-speaking countries are adequate for the students to make the most of their English skills, such countries are comparatively far from Japan requiring much cost. In this article the study trip to Taiwan is concluded to be no less educational than such places as Guam.

KEY WORDS: overseas study trip, English, Taiwan, school exchange program

１．はじめに

高専では授業を中心として様々な教育が行なわれている。部活動や学生会活動、体育祭や高専祭等はその代表的なもので、高専に限らず中学校や高等学校でも無論行なわれている。更に学校行事として芸術鑑賞、マラソン大会、登山が考えられると共に、合宿研修旅行やスキー旅行など宿泊を伴うものもよく行なわれている。これらの行事は知識や技術の教授を主な目的とする授業とは異なり、青少年の心と身体の育成に多大な教育的効果があると考えられる。

明石高専では現在宿泊を伴う学校行事として１学年の４月下旬に行なわれる新入生合宿研修旅行が１泊２日で行なわれる。これは新入生が寝食を共にすることによって新しい仲間と親しくなる機会として非常に重要な役割を果たしている。その次は３学年が対象で１０月中旬に行なわれる１泊２日の合宿研修旅行である。これは各学科の担任がそれぞれ独自に企画する物で、専門分野に関わる工場見学等に加え、遊園地やラフティングといった人間関係をより豊かにすることに主眼を置いた要素を組み入れることが多い。興味深いものとしてはログハウスに泊まり夕食を自炊するといった企画もあった。最後は５学年の見学旅行であり１０月中旬に４泊５日の約１週間の旅行である。これは中学校や高等学校でいう修学旅行に相当するものと考えることができ、学生達にとっては有意義であるだけでなくクラスメートとの最後の旅行であり、楽しい思い出となって心に刻み込まれる一大イベントであるといえよう。

２．見学旅行の簡単な経緯

明石高専の見学旅行は元来、年度当初に行なわれ、電気工学科（現在の電気情報工学科）や機械工学科では、いくつかの工場見学等を実施することにより、学生の就職に対する一助、つまりキャリヤ教育の一環と

*電気情報工学科

して行なわれてきた。また、土木工学科（現在の都市システム工学科）や建築学科では土木現場や建築物を生で見て触れることで、より深い理解の助けとしてきた。

最近では見学旅行が１０月中旬に実施されるようになり、就職先を考えるという直接的な目的ではなく広く社会を見たり経験することで学校内だけでは学べない多くの事を身につける機会として捉えられるようになっている。最近では国際化が重要視されるようになり、旅行先として海外へ行くことが増えてきている。

本校では建築学科のみ１９９８年頃から既に海外に行っており、好評を博している。外国の建築物は国内のものとは全く異なり学ぶところも多い。また、外国の学校との交流も盛んに行なわれてきており、得られるものも大きいことは想像するに難くない。この経験をもとに、電気情報工学科と都市システム工学科では２００５年度から見学旅行先として海外に行くようになった。機械工学科のみ学生の要望により現在も国内の旅行にとどまっている。

３．２００５年度の見学旅行

明石高専電気情報工学科では前章で述べたように２００５年度から見学旅行として海外へ行くこととなり、グアムに行ったが、２００６年度は諸事情を考慮して台北とした。言語として国際的に最も通用している英語を生で触れる機会を得るためには、英語を日常用いている英語圏の国に行くことが最適であると考えられる。この観点からグアムは日本に最も近い英語圏であると言え、最適である。ところが旅行後のアンケート調査によると、「目的が達成できなかった点があれば挙げてください」という記述欄に１０件のうち３件は日本語が通じたので英語の勉強にならなかったとの記述があった。５段階で表した総合評価（図１）では上位２ランクを合わせて良いと答えたのは７５％に上り、旅行の満足度としては十分であったといえる。また、グアムという行き先について満足したかどうかについて５段階評価（図２）で上位２ランクを合わせると６３％が満足していると答えている。学生が行き先について満足かどうかを回答する際に、必ずしも見学として意義があったかどうかに基づいて答えたかどうかは保証されているわけではないことには注意が必要である。

４．２００６年度の見学旅行

旅行の行き先は選択肢として台湾、ハワイ、シンガポールを取り上げ、学生の希望を尊重しながら決定した。ハワイは飛行機内で宿泊となるため現地での見学日数が少なくなり、魅力が涌かなかった。シンガポールは英語が母国語であり魅力的ではあるが、旅行の費用の点から台湾にはかなわない。最も安く行ける行き先ということもあって台湾へ行きたいという学生の割合が最も多かった。

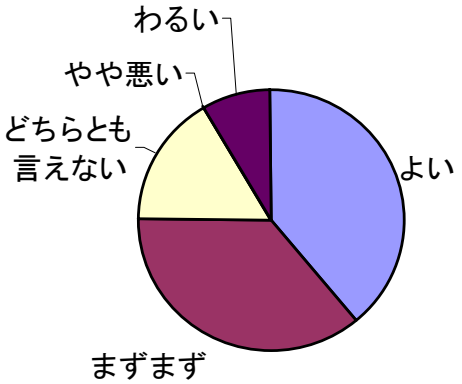

図１　総合評価（2005 年度グアムの場合）

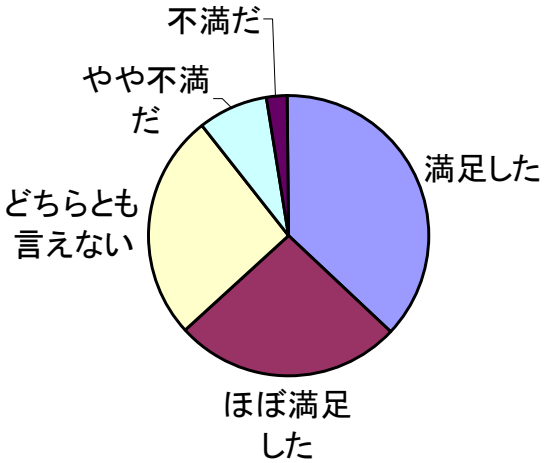

図２　行き先の満足度（2005 年度グアムの場合）

ここで旅行の内容についてかいつまんで述べる。詳しい内容は報告を参照されたい（例えば、本校の広報誌である学校だよりの２００６年度臨時号に詳しく紹介されておりホームページ上で閲覧できる）。朝早く関空を出発し台湾に到着したのは午前中であった。バスで最初に保安宮を訪れた。これはお寺で観光の１つである。午後は自由行動でホテル周辺をうろうろし、はじめて見る台北の雰囲気を楽しんでいた。２日目は終日自由行動で、地下鉄の乗り放題の券をもってあちこ

ちと自由見学を行なった。それぞれが色々な場所に行っていたようである。３日目は午前中に第２原子力発電所を見学し、午後は台北科技大学への訪問（図３）であった。４日目は台北最大の観光名所とも言える故宮博物院と忠烈司における衛兵の交代儀式を楽しんだ。最終日は紙博物館と歴史博物館を訪れた後、台湾の旧家を見物して帰国した。

図３　我々が参観した台北科技大の授業

５．２００６年度の見学旅行の効果

統計的な数字から言うと、総合評価（図４）として良かったと答えた者は全体（４２名）の８１％を占め、前回のグアムより良かったと言うことができる。また、行き先が台湾ということについては６２％の学生が良かったと答えており、これは前回とあまり大きな差はなく、台湾が特に良いということにはつながらなかった。海外旅行が生まれてはじめである学生が大半であるため、はじめての経験としてインパクトは十分大きく、台湾が他と比べてどうかということを議論することは難しい。グアムなどの他の行き先と比較することもできるが、学生の気質の違いなども反映され、はっきりした結論を出すことは難しい。

自由記述欄に任意で書かれた内容について検討する。行き先が台湾であることについて７名の学生は食事が口に合わないという意見であった。毎回豪華なコース料理であったが、味付け等の違いに拒否感を感じたのであろう。これは良い意味で捉えると異なる文化を体験したと捕らえることができる。また、街での汚らしい感じ、なんとも言えぬ日本では遭遇することのない臭いを不快に感じた学生が６名いた。これも同様に理解することができる。逆に当初はあまり興味を持たなかったが行ってみると以外に台湾は良かったと３名が述べている。

言語についても色々な意見が出されている。英語が

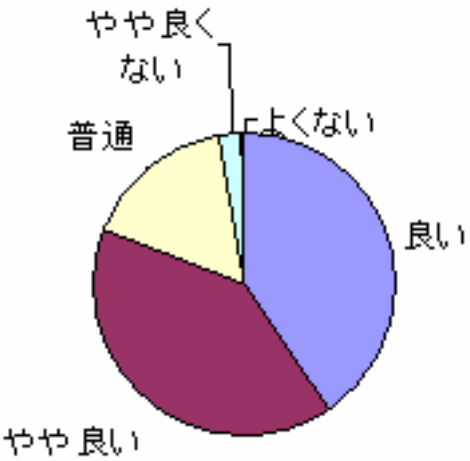

図４　総合評価（2006 年度の台湾）

図５　行き先の満足度（2006 年度台湾）

通じなかったと記述した者が５名あったが、英語圏に行くべきであったと不満と感じる者もいれば自分の英語力のなさを実感している者もおり、捉え方はまちまちである。逆に英語が通じてその国際語としての便利さを実感したとの記述は９名にのぼった。英語圏でなくとも海外に行くことにより英語の重要性を認識する機会はあるといえよう。また、意外にも日本語が通じたとした記述が１２名あった。これは、海外の旅行の意義を否定するというよりは、海外でも日本語が通じるという現状を目の当たりにして近隣諸国の気迫を感じたようである。台湾の人がこんなに日本語をしゃべるのに自分の英語は十分使えないと反省する者もおり、色々な刺激を受けたといえよう。また４年で中国語を選択した学生もいるのであるが、中国語が使えたという意見はなく、むしろ４名ほどの学生は中国語が使えなかったと述べている。台湾で一般に話されている言語は北京語ではなく台湾語であるため聞いていても全くわからないのはある意味で当然である。中国語が使

えなかったことで４年の中国語の授業を非難する他力本願的な学生もいたが、いずれにしろ言語の修得がそう生易しいものではないことは身にしみたのではあるまいか。特に台北科技大学の学生が英語をうまくしゃべるのを見て、かなりの劣等感を感じた学生がいた。

６．おわりに

費用に制限がなければアメリカに行こうがイギリスに行こうが自由にすれば良いことであるが、少しでも経済的に行なおうとすると、近隣諸国の中から見学旅行の行き先を選ばなければならない。本論文において考察したように、台湾は英語を母国語としない国ではあるものの、学生は語学について様々な感想をもち、意味のある経験ができたといえる。そのうえ日本では経験することのできない異国情緒を肌で感じ、また現地の人と触れ合うことで彼らの心意気を感じることができたことは、何よりもの大きな収穫であると言えよう。日本でできない経験ができることは海外旅行の最も大きな長所である。

今後の課題として、台湾の他の近隣諸国である韓国、中国、香港等と比べ、見学旅行先として効果に違いがあるかについて興味が持たれる。しかしながら台湾は一般的に親日感情が広まっているとのことや治安状況が良いとのことから、安全面から見て、最も行きやすいことも後押ししている。ちなみに２００７年度の学生の希望もやはり台湾が最も多かったことを申し添えておく。